

## 史料紹介

# 『藤堂御家譜并雑書』(三)

## 三重大学歴史研究会例会古文書の会

### はじめに

前号に引き続き『藤堂御家譜并雑書』を翻刻する。なお、この読解にあたった古文書の会の構成員は以下の通りである。

〔古文書の会構成員〕(\*を付した者が入力・校正を行った)

藤田達生\*、久志本英男\*、萩原淳也、木下武一、永田智子、太田光俊\*、林希代美、小林宗高、正入木沙絵子、安藤仁美、斎藤隼人\*、山下潤子、三浦理沙

### 凡例

一、『藤堂御家譜并雑書』(一) (二) (本誌前号、前号で記した凡例に、基本的に従う。

### (承前)

一、元和二年正月元日、御内祝尾州公・紀伊公・水戸公・高虎・  
(徳川義直) (徳川頼宣) (徳川頼房) (藤堂)  
掃部殿、同二日之晩御謡初にも、右御一門方御同前に御登城被遊候、  
(井伊直孝)  
外御大名衆、年頃二、三日御登城被成、御謡初二ハ御出舞之候、其以後毎年頭御規式、六月十六日御嘉祥、十月  
いのこの御祝儀にも御一門様方、御同前に御登城被成候、  
一、同月廿一日、神君駿城より田中に被為成候処、此所に於て俄に御

不例、同廿四日府城に還御、御一入御所勞不被為勝、江城に宿次を  
(後河内府中)  
以言上、秀忠公被為驚、則二月朔日武州御発駕、二日の七つ過に駿  
(備前)  
府へ御着座、則神君御対顔、御病体被為伺候也、此節高虎公、二月  
二日於勢州御聞召而、津の城を御立、昼夜の無隔被為急、四日の夜  
駿府へ御着、すなわち御登城、御機嫌御窺被成候所二神君御病座へ  
被召出、御一門様方より早速の参上深厚之御志不淺被思召、御懇之  
尊命也、大樹公も同様の聰命也、御様体日々不被為勝候故、駿府之  
(備前)  
浅間の社井垣など再興被成候、高虎公御屋鋪にても、南光坊僧正・  
(天徳)  
其外叡山の僧衆數十人御呼被成、二夜三日之御祈祷御執行被成候、  
然共三月五日にハ取分御容体被为重候也、同月十七日神君太政大臣、  
(夜力)  
御昇進の勅使広橋大納言兼勝・西三條大納言実條両伝奏・其外公家  
衆、駿府へ御下着被遊、諸国よりハ、右の為御祝儀品々献上物あり、  
(書)  
四月朔日堀丹後守直寿を神君御病座の御前へ被召出、大樹公御列座  
にて此度之御快然難斗思召候、薨御の後若命を背き敵対之輩有之に  
於てハ、一番合戦藤堂高虎、二番井伊直孝に被仰付候、汝ハ兩人か  
中に備を立、折を見合横鎧を可入と被仰付候也、神君御重病、大樹  
公、高虎公昼夜御看病、御療養の御相談ハ不及申、其外御仕置等も  
御両公、種々御密談被仰上候事、御腹心の如しと被仰、御両公御機  
嫌也、然ル所御不例御大切之期に及、高虎公御前近く被召寄神君聰命、

高虎当家に対し、年来の忠義言葉に尽かたし、殊に大坂に於て、色

々変在之節深き心入、其後関ヶ原前後の働、殊更去年大坂表、始中終の眞実忠義の心入余人に可並者無之、かやうに天下静謐の威光、

偏に和泉守か心入深き故なりと御感涙を被為催、大樹公に被仰伝、  
然る上ハ天下御泰平、御法式段々詳ニ御遺命あり、其上にて御盃神

君被召上、其盃を高虎公に被下頂戴被成候、則御腰物大御御拝領、時に高虎公の御盃を大樹公へ可指上と神君之聽命也、大樹公を高虎公

之子と可存　大樹公も我等同然に被思召候へと、則高虎公御指刀を  
大樹公へ進献致へきとの聴命にて献せらる、大樹公御盃を高虎公へ

御返し被遊御頂戴、其盃を神君へ返献、すなハち被召上御納也、尤御肴も被下、高虎公・も御肴被献、神君高虎公の御手を御取被遊、

数十年の忠勤手柄、今更御失念不被成、御名残をししく被爲思召候と、段々色々御懇之尊命也、高虎公も感涙御流し被成候て、数十年の御

厚恩難有奉存候、来世にても又不相替御奉可申上と被仰候へ、  
神君上意に左様ニ被存候も、尤ニて宗旨違候間、来世にて一所に公

成申間敷と上意也、高虎公左様に被思召候て、今日より天台宗二罷  
成可申と被仰上候へハ、神君御満足に被思召候と上意にて、其時輝

東陽の墨跡御懸物・四聖坊の肩衝御拝領被成候此肩衝、東山殿御所持之内、  
にて漢のかたつきも御被候、去年  
五月八日に八京都二条の御城に於て、(山城國) 神君御酌にて御両公の御盃御

頂戴、又此度も御盃御頂戴被遊候事、御家門様を始天下に其類なく御冥加に被相叶候御事也、神君御不例日々被指重、四月十七日駿府

於て御他界被遊候、御行年七十有五歳尊号  
大相国一品徳蓮社崇智道和大居士尊儀

駿州久能山に奉葬、又遺命にて野州日光山に移し奉る、重て大樹公

五拾五万石に不足成に付、田丸付白子付にて御足し可被進候間、

田丸の替り御屈被成候様にと被仰出候付、大和・山城にて御拝領被

成度と被仰上候付、大和・山城にて五万石被下候、右に付京大坂へ

の手寄も宜く、物成も田丸へ悪く御座候処、城・和ハ物成も能有之、

御勝手にハ宜御座候、右の御加増すくなくと、南光坊ひそかに御侮

被成候へハ、高虎公南光坊を散々に御呵被成候、御覺之趣ハ略仕候、

一、元和三年三月十三日勅使関東へ下向、右之趣被為贈、同月十五日

日光山へ奉崇、今日靈柩久能山出御、御普請代諸將御供也、四月二

日日光山へ着御、同八日御廟塔におさめ奉る、同十四日正殿に

移し奉る、宣命使中御門等相殿、奉幣使清閑寺等相殿、同十七日東照大権現

の御神前御祭礼、同十<sup>可奉入</sup>勅使日光山を御下向、江城へ帰府、大樹

公ニ参向の公家衆不殘御謁見、時服金銀夫々法式の如く賜ありて各

帰路なり

右御神より先に元和二年六月高虎公に被仰付、野州日光山の地形御願の所、宜かるべき儀に相究、書物、絵圖を以

て日光山へ奉崇、今日靈柩久能山出御、御普請代諸將御供也、四月二

日日光山へ着御、同八日御廟塔におさめ奉る、同十四日正殿に

移し奉る、宣命使中御門等相殿、奉幣使清閑寺等相殿、同十七日東照大権現

の御神前御祭礼、同十<sup>可奉入</sup>勅使日光山を御下向、江城へ帰府、大樹

公ニ参向の公家衆不殘御謁見、時服金銀夫々法式の如く賜ありて各

帰路なり

右御神より先に元和二年六月高虎公に被仰付、野州日光山の地形御願の所、宜かるべき儀に相究、書物、絵圖を以

て日光山へ奉崇、今日靈柩久能山出御、御普請代諸將御供也、四月二

日日光山へ着御、同八日御廟塔におさめ奉る、同十四日正殿に

移し奉る、宣命使中御門等相殿、奉幣使清閑寺等相殿、同十七日東照大権現

の御神前御祭礼、同十<sup>可奉入</sup>勅使日光山を御下向、江城へ帰府、大樹

公ニ参向の公家衆不殘御謁見、時服金銀夫々法式の如く賜ありて各

軍の儀、無二に頼思召れ候、<sup>此時の宗旨</sup>返すく藤堂此世ならず来世迄深

く頼被思召候、大僧正も御側へ被参、色々遺言の事終て、日本ハ神

国の事に候へとも、天下泰平国土安全にハ家康公を神に祝ひ南光坊

大僧正と、藤堂高虎両脇に補佐の神と罷成候事、権現様御歌

我御代は千代にやちよを細石のいハほと成て幾世守らん

扱御存世の内に、高虎公へ被仰付候ハ、南公坊と申談何れの国にて

も境地よく、来世末代までも宜おもひ寄し所に、勧請致し候へと懇

に被仰置、誠に深き御遺言にハ高虎公と南光坊勧請の所を御鎮座可

被成と、御契約ふかく御座候、日光山御宮所の御繩張高虎公、南光

坊元和二年十月九日日光山へ御着被成候て、山のうら方々御見立被

成、只今之御宮所高虎公御繩張にて御座候、御尊居の前に高虎公も

結構に寺御建被成候、

左大僧正天海

或 山王権現ニテ僧形也

右藤堂高虎

或 摩陀羅神ニテ俗体也

一、高虎公予州にて金比羅神、別して御信心被遊候、今比羅神・摩陀

羅神とハ一体、叡山にてハ西坂本、赤山大明神と申、日光山にてハ

二荒山権現、則日光権現と申也、神座にてハ権現ハ東方の地主、素

盞鳥尊、天海ハ山王と化現也、大巳貴大物主命也、高虎公は事大主

一、高虎公予州にて金比羅神、別して御信心被遊候、今比羅神・摩陀

羅神とハ一体、叡山にてハ西坂本、赤山大明神と申、日光山にてハ

二荒山権現、則日光権現と申也、神座にてハ権現ハ東方の地主、素

盞鳥尊、天海ハ山王と化現也、大巳貴大物主命也、高虎公は事大主



給、我等ハ落髪をも致し候者、逼塞

申候へハ相濟事に候段必定、入内当年中

出取延引、右之通相調候様、藤堂泉州水（高虎）肝

煎候て、生々世々わするましき由申伝られ

候者、抔悦不可淺候也、

九月五日

右大臣とのへ

一、秀忠公御在京被遊、初秋大坂御城の縄張を被為候、此御時も高虎（徳川）

公御一人大坂へ御供被成候、一兩日大坂御城廻り御一覽被成談合被

成候、御縄張御究被成候、扨大坂より春日へ御社參被遊候、郡山の

城に御着座被遊、翌日春日近辺御見物被遊、郡山へ還御被遊、郡山

より江戸へ御下向被遊候、此節も高虎公御供被成候、其節高虎公ハ

奈良に御残り被成、扨今度大坂御縄張御普請の御積を被成候、明申

年京二条御城御普請ハ北国衆、大坂御城御普請ハ西国衆、両所御普

請一度に可被仰付、御評議にて御座候へ共、大坂御普請大分に御座

候故、西国衆迄にてハ出来不仕積にて御座候、此目錄奈良にて御仕

立被成候て、上様へ御上被成候、其目錄（西國）持參仕候、御老中迄

口上にて様子申上候へと被為仰付、急き罷下候様に被仰付、浜松に

て御老中迄差上、御口上之趣申上候処、高虎公御積候通御尤に被為

思召候とて、申年大坂御普請西国・北国打合せ、一ヶ年に御本丸・

二ノ丸の御普請成就仕候、大坂両外輪の御普請ハ右の後被仰付候事、

一、高虎公惣て大事の御分別御工夫被成候時ハ、夜も御起被成候て、

上下を召大小を御指被成候て御思案被成候、

一、同六年摂州大坂城御縄張被相改、澤地の深さ石壁の高さ古に倍あ

り、双図式を以て御定天下の国主・城主分限に応し町場を以命令あ

り、高虎公御請取、兩年に御普請御成功也、御普請中も御感の書翰

被成下候也、御普請請出来、以後五百めの大筒百挺御城付に被献（高虎）

守、一二の丸市正曲輪、矢狭間五間に一つ充割被備置也、城郭御造営都

て十式ケ所也（此外奥國に於て安普請、の城費をも被兼候也）

一、同八年、大樹公高虎公の宅へ御成、時服白銀御拝領也、

一、同九年、御上洛の御供也、御家士御供の面々人馬葵花（本堅）出立也、

然る所摂州大坂城郭の内少広く取、繕の縄張等被仰付、大坂へ御越

石岸を御築、悉く成功御感不斜也、二条の亭へ御詰被成御密談あり、

一、寛永元年十月六日、進藤五の御脇差御拝領也、

一、同式年五月八日、大樹公高虎公の御宅へ被為成、高虎公へ御帷子

三十御單物、白銀五百枚、高次公へ御馬疋被下候也、

一、同六月廿八日、家光公高虎公御宅へ被為成候、御帷子廿・御單物三十・

白銀千枚御拝領、高次公へ御腰物、高重公へ御馬疋被下候也、

一、同年高虎公御密談、武州不忍池の上に忍岡と云山あり（後によ、野と號）此所土

地高く山内広く麓に御手洗あり、此地を御取改宮社、堂舎、坊屋を

御草創ありて、東照宮を被遷度方高虎公に尊命あり、彼山ハ大都城

より良に当り、洛陽の比叡山の御心持にも御座候、其宜趣御請言上

あり、大樹公其趣御感あり、然者御宮殿金銀をちりはめ、高虎公御

造営ある也、石花表（高虎）御神前の左右石灯籠ハ天下の諸大名被献也、

公儀より藥師堂、三佛堂、宝塔、伽藍御造営あり、日光御門主被備

置<sup>馬少門家</sup>東叡山圓頓院寛永寺と号す、御宮付僧坊、舎屋を御修造なり、

今年四月十七日神靈を奉遷座る、然るに御籬の辺に高虎公一字の僧

舎お修造あり、寒松院と号く、此寺にて大樹公御参詣の節御装束被

遊、これによりて公儀より寺領千石被下置<sup>御家より寺領、武百石有付属</sup>、高虎公御代々日

蓮宗たりといへとも、右御開起に付天台宗に御改、右の寒松院へ御

遺骸御葬礼なり<sup>毎年七月十四日上様寒松院へ御出御香被遊、同十五日にも御出死の者、共靈前にて御焼香被遊候也、東叡山の儀へ其品により御執行ある事なり</sup>

一、同三年、後水尾帝より寮の御馬鞍置、高虎公御頂戴なり、高次公

も御上洛の御供にて御座候、二条へ<sup>（通）</sup>行幸然して高虎公左近衛権少

将に被任候也、御上京中秀忠公、家光公御滞在のうち日々二条御登

城被成御密談有之、秀忠公蒙寵命転任御前驅を被仰付候也、

一、同四年、大樹公東叡山寒松院へ初て御成、東照宮御拜礼被遊時に、

高虎公へ御腰物被下候也、

一、同六年三月十七日、寒松院へ大樹公御成、高虎公へ御腰物<sup>書付御</sup>御拜

領也、終日御座被遊候、

一、同年六月十七日、家光公東叡山へ御成被遊候時高虎公へ御腰物<sup>延寿</sup>

御拜領也、

一、秀忠公より休務肩衝の御茶入御拜領也<sup>年月、○元和二年、年號可考、</sup>

一、輝東陽の墨跡御拜領御掛物有之<sup>年月、○元和二年、年號可考、</sup>

一、神君より被下候御直筆<sup>不知、年号</sup>

尚々かハる儀候ハす候、此よし

左衛門太夫可申也、又申候、すこしもよく候ハハ

御上待入候、

御書状被見候、大納言殿御越しゆこんにて

御心安候へく候、貴様しゆもつ氣に候よし

御やうしやう可有、申度儀多ク御入候まゝ

すこしもよく候ハ、御上待入候、恐々謹言、

二月九日

大

藤和泉<sup>藤左高虎</sup>

一、神君内大臣に御昇進の時の、

尚々御書状くわしく見申し候

御書状令被見候、其様しゆもつ御やう

せう尤二候、何様面時可申承候、我らも

すはく少おこり申候、但早々申入候、

三七

大ふ

藤左

一、秀忠公へ御在津より言上之御返翰御自筆、

尚々度々念二入候段喜悦候、

来札令祝着候、書状之通相心得候、誠

度々被入念候段、別而満足候、将又

もしハ石船置候処、石数一二万程も  
寄候、明年可被下候由令祝着候也、

八月十三日  
(徳川)  
秀忠御書判

藤堂佐渡守とのへ  
(蒲池)

切々書状令祝着候、其元相替事無之由得  
其意候、御所御下候時分可被下候由、万事  
其節可申候間、不能具候也、

十月二日  
秀忠御書判

藤堂佐渡守とのへ

尚々念入候儀令祝着候、  
書状令祝着候、然者爰元普請の事、  
御所御氣に入候間、可心安候、誠万事  
心付候事、念被入被申越候段、別而  
満足候、爰元御所機嫌甚息災に  
御立候事も、其元仕置等申付候て、  
来年もゆるくと下られ候へく候火中く、

かしく、

極月五日  
秀忠御書判

藤堂和泉守殿  
(蒲池)

尚々爰元大学事万事可心安候、  
(藤堂高忠)

書状令祝着候、将又上様無替事御座候由  
得其意候、然者極月廿二日の夜駿河之  
城、火事出来候へとも、無異議御所息災  
御機嫌能候間、可心安候、其中可被下由大儀  
成事候、弥様子聞合候て被下尤二候也、

正月六日  
秀忠御書判

藤堂和泉殿

尚々入念候段祝着候、難申尽候、則書状令火中候、  
来札令披見候、其表之様子具に申越候、  
得其意候、誠に入念被申越候段、満足難  
申尽候、其意珍敷事候ハ、猶以被申越候ハ、  
可為満足候、爰元随分無油断候之間、可  
心安候、万事追而可申候、謹言、

七月朔日  
秀忠御書判

藤堂和泉守殿

大学下候て、眼病之儀委聞届候、少快氣  
之由、先以て令祝着候、弥無油断養生  
肝要二候、将又大坂へ御越候て、来年の普  
(横津園)

請之儀、念入候段、令満足候、猶重而可申也、

九月二十六日

秀忠御書判

藤堂和泉守殿

尚々朱印の儀も則遣候、

書狀之通令祝着候、其許仕置の儀

無油断申付候段尤二候、将又御所

御下候而、御機嫌能候間、可心安候誠以

令満足候也、

霜月十四日

秀忠

藤堂和泉守とのへ

書狀念入候段令祝着候、御所上洛之儀、

五日に相定候、上方珍敷事ハ、可被申越候、猶追而

可申候也、

二月廿九日

秀忠

藤堂和泉守とのへ

〔書狀令祝着候当年御所下り候旨〕欠落力

万事用之儀も多候間、来春にても直々

二と思召候て、もし駿府へ参度由、佐渡を

使者ニ遣候へハ、当年ハ無用之由被仰越

候間、春ハ駿府へ可参候、其方も其

刻被下候ハ、尤二候、将又福島市正事

得其意候、誠念入候段令満足候也、

霜月三日

秀忠

藤堂とのへ

一、駿府より言上之書翰、

尚々其元万事念入候由尤候、

其元之様子具被申越候、念被入候段令祝着候、

将又御所御息災之由、令満足候、猶重而可申候也、

四月十七日

秀忠御書判

藤堂和泉守殿

尚々此度ハ早々残多事ニ候、火中く、

書狀令祝着候、御所廿六日駿府御立候由、

得其意候、爰元へ御下候由候間、仕置之儀万

事直段可得其意候、誠念之入たる事とも

申越候段、令満足候、

十月晦日

秀忠

藤堂和泉守とのへ



いつミ殿参る

念之入書状令祝着候、御所様御煩弥能候由、  
大慶不過之候、御見舞ニ参度候ハ、駿河  
年寄共方迄聞に遣候、弥其程見はからひ可  
申越候也、

正月廿五日

秀忠

藤堂和泉守とのへ

わさと申遣候、千度うへもんに口上之とおり  
まんそく候、貴所・被申越候事、さた  
申ましく候ま可心安候、かしく、

八月廿八日

家光御書判

いつみとのへ

一、元和九年(一六三〇)後八月御国へ被下候、御自筆、

明日爰許あいたち候、いよく眼病ゆたん  
なくやうしやう専一二候、眼病しかとこれなく  
候とも、やかて江戸へ下向まち入候、尚  
いかのかミ可申候也、

後八月七日

(公室年譜略 宗国史デハ秀忠書判トアリ)  
家光御書判

(藤堂高虎)  
いつミ

つほねにねんころにおほせこされ候、へつ  
してまんそく申候、つねくもさやうに  
そんし、いよくこれさきへもいけん  
かましき事候ハ、心おかれす申され候ハ、  
いよくまんそくたるへく候、いさいは  
つほね可申候也、

九月十八日

家光御書判

藤堂いつミとのへ

公方様御きけんよく御さ被成候よし被仰越  
満足申候、ここもとはつと火の用心以下申付候、  
きつかいあるましく候、ねんを被入まんそく二候、  
やかて待入候、かしく、

四月十八日

(徳川)  
家光御書判

申こされ候かき付之とおり、おもひ入れ  
心中まんそく申候、かしく、

十八日

(徳川)  
家光御書判

(藤堂高虎)  
いつミとのへ

其許ふしんに付、くろうたるへく候、頓而下国待候、猶井上主計正可申候也、

六月廿七日

家光御書判

藤堂和泉とのへ

此已前・其方万事心入候段、まんそく候、対面之時分もおもひ候ほとハ不申、先日其方心中之通くハしく聞候て、是又まんそくニ候、猶以これ先もよろつ頼入候、恐々かしく

二月六日

家光御書判

藤堂いつみ殿

永井伝十郎申おかれ候事、具ニきゝ申候、ねんヲ被入段、まんそくに候くハしくハ伝十郎方・可申者也、

二月十一日

家光

藤堂和泉とのへ

一、家光公御詠歌之色紙一枚御拝領也、

一、寛永七年庚午年九月東武御城下に於て高虎公御病癒、同十月五日

江府柳原之亭にて御卒去被遊候、東叡山寒松院へ御葬礼、御導師南光坊大僧正(天徳)贈慈眼大師也、

寒松院前伊州太守羽林道賢高山権大僧都

一、高次公慶長六年御誕生也、

御母公長谷部信建十七世の孫、但馬国の住人長越前守連久娘也、

永禄八年御誕生、慶長四年九月御入奥御名さいくま様と申候、同六年正月之朝御夢想に予州出石の観音へ御参詣被成候に、垣の中程にて老僧一人山上より下向致し松寿院様を見奉り、汝に宿縁深きとてよろこぶ気色にていたき付候故、高虎公きつと深き御事御夢にも御忘なく御ふり切被成候へハ、光明かかやき御身に行出口目覚申候、其夜の事深く御包被成候へハ、松寿院様高虎公御尋被成候へ、出石の観音堂へ御子孫之事御立願御かけ被成候由、御疑もなき出石観音の御利生にて、同年十一月十一日に高次公御誕生被成候、

一、同年、板嶋より今治へ御所替被成候事、

一、同八年、三歳にて初て伏見於て神君へ謁し賜ふ、

時に御脇差(伊予國)御拝領、

一、同十一年正月、初て江戸へ候す神君みつから御脇差(伊予國)を賜ふ、大

学助と号す、同秀忠公に謁たまふ、

御刀(兼光)御脇差(光)をたまふ、

一、元和二年正月十五日従五位に叙、

一、同四年、初て御帰国の御暇被下候節、御刀(左文)御馬耆足御拝領也、

一、同九年、御帰国の節、御刀(志津)御馬耆足御拝領、

一、寛永三年、御帰国の節、御刀(美次)御馬耆足御拝領、

一、同六月廿八日、家光公よりも御腰物を賜、

一、同五年、御帰国の節、御刀（文字）・御馬一疋御拝領、

一、同七年、御父（高虎公）卒給ふ、秀忠公・酒井雅樂頭・土井大炊頭（利勝）使として高次公（康定）へ命令あり、遺跡封国悉く父のこたく給ふへしと也、

同十一月廿六日高次公其家臣七人をひきい秀忠公に謁す、雅樂頭・大炊頭其外近臣左右へ在て仰に、高虎当家に對し累年の忠節敢て不忘、將軍家に粗伝聞たまふとも未詳に知給へし、今より高次を以て高虎の忠勤を報せらるへし、たとひ高次あやまり有しとも三度ハこれをゆるさるへし、大炊頭此旨を將軍家に奉公すへしと也、秀忠公みづから曆を取、廿八日將軍家の徳日なり、高次継目の礼なすへしと被仰、將軍家・高次ハ若年なり、君臣ともに幾久からしめんと、吉日を撰ひ給ふと仰あれと也、高次公聞給ひて恩恵の忝さ謝するに詞なく、不覺の涙下て袖をうるほし給ふ、同日將軍家光公に謁給ふ、家光公高虎か忠勤を聞たまひいんきんの御詞あり、家臣等も拝礼し奉る、忝も御詞をかへらる（おへらる／へ、ノ字誤ハけ誤）、

一、同八年、秀忠公の御異例を祈りのため、武州上野の靈廟の廻廊玉垣を作る、

一、同年十月、帰国の御暇時に、衣服（三十）・白銀（三十枚）等を賜ふ、秀忠公高次公へ仰に、將軍家若年にして汝も又若し、宜忠義を励へしと、高木貞宗の御刀・御馬等を賜ふ、夫より秀忠公御違例、不予の色あり、依之高次公又江戸に復し尊公の安否を伺ひ給ふ、同九年正月廿四日秀忠公薨給ふ、御行年五十三歳、遺命として虛堂の墨蹟・白銀五万両を賜ふ、

一、同九年、高次公の館類火す、家光公より白銀五万両を賜ふ、

一、同十年、御伽の衆に召加へたもふ、

一、十一年、家光公御上洛の御供、同七月廿二日從四位下に叙す、大學頭転し侍從に任し給ふ、同時節 仙洞より青江の御太刀を賜ひ、すなハち近衛殿より伝たもふ、

一、同十二年、松平安芸守光晟・高次公・有馬豊氏三人旨を奉て江戸大都城二の丸を築、高次公二人に先達て其功を成す（石垣し百三十余間、南七間堀土三万余坪なり、高次公薨後卒を愛し、人民をあへれむや、へに、不日の功なりし也）、家光公経しの速成事を大に感し給ふ、高次公御前へ召、直に帰国の暇をたまふ、白銀・帷子・御馬をたまはる、家臣等も被召出白銀・帷子を下し賜ふ、

一、同十四年、秋の頃より筑紫吉利支丹一揆有之、

御内々被仰付候故、御備定有之左の通、

藤堂仁右衛門（高徳）

藤堂采女（元徳）

藤堂玄蕃（貞次）

藤堂新七郎（貞徳）

藤堂石見

桑名弥次兵衛

藤堂与吉（高吉）

藤堂金七

保田治右衛門

藤堂宮内少輔（高吉）

小森彦右衛門

渡辺内膳（直忠）

藤堂内匠

藤堂主膳

藤堂源助（直忠）

湯浅右近

落合左近

米村弥五兵衛

岡本弥一右衛門

菊川源太郎

和田五左衛門

石田惣左衛門

多羅尾十左衛門

野崎内藏助

長柄二百本

若原一郎左衛門

磯野源右衛門

小川五郎兵衛

吉田貞右衛門

須知孫左衛門

中小路助之進

梅原頼母

のほり五十本

旗本

内海六郎左衛門

藤堂監物(信房)

小川又左衛門

矢倉大右衛門

西川又兵衛

黒母衣

坂井土佐

藤堂兵庫

赤井悪衛門

使番白母衣

藤堂孫八郎

奥山五郎左衛門

藤掛勘十郎

田中内藏丞

三村弥右衛門

田中源兵衛

池田権左衛門

稲葉小左衛門

玉置作兵衛

大田権右衛門

石田三郎左衛門

堀田弥五左衛門

佐伯権之助

小野正兵衛

藤堂兵左衛門(玄徳)

藤堂主殿馬上司

沢田平大夫

横浜内記

尼子三郎左衛門

沢隼人

近藤三左衛門

多羅尾四郎左衛門

堀伊織

中根六兵衛

内堀弥五左衛門

横田信助

雲林院忠左衛門

広瀬治左衛門

足田勘左衛門

安藤源大夫

藤堂四郎右衛門(宗徳)

右京組

藤堂勘ヶ由馬上司

日野将監

梅原勝右衛門

横浜助右衛門

野依清右衛門

彦坂加兵衛

箕浦藤兵衛

高崎弥右衛門

吉武次郎右衛門

多賀縫殿

井関彦兵衛

渡辺高之助

伊賀留守居

藤堂出雲組共

堀田右衛門兵衛預り鉄砲

伊賀留守居

須知出羽組共

白井九兵衛預り鉄砲

右之通可得其意者也

寛永十五年二月廿日

大学御判

藤堂出雲殿(宗徳)

藤堂仁右衛門殿

藤堂采女殿

藤堂主膳殿

右之御内備ハ一揆の土民手強、上使衆も筑紫大軍も不及行働故、高次公へ可被仰付御内意有之故、御家中御備被仰渡候、然所二月廿七日落城致候ゆへ、無其儀相濟候也、

一、同年御帰国之節、白銀・衣服・御馬を賜ふ、  
一、同十六年の春、上野の靈廟炎上、高次公回廊玉垣を造営旧規に倍す、

一、同八月、江戸大都城の本丸火災あり、高次公一人旨を奉て石垣を築、両月不越候て成功す石垣周し千五、百余年なり、家光公御前へ被召、早速功を成す旨、慰勲の御詞を被懸給ふ、家臣等へも衣服・白銀を下し給ふ、

一、同十七年、御帰国之節白銀・衣服・御馬を賜ふ、  
一、正保元年、御帰国之節御拝領物右同断、  
一、慶安元年、御帰国之節御拝領物右同断、

一、同四年、家光公薨す、高次公に命して靈廟の石垣を日光山に築しむ、

一、同五月、右日光山御成功、二月にとつてはしめ八月に功をなす、

大山を掘ひらく其深さ二十仞、山の底に一面のはんしやく有、其堅

事金鉄の如し、いものくきの火を以て是を焼、斧を以てこれを鑿而、

悉く其地を平行て石垣を築<sup>凡石垣</sup>、將軍家綱公其功を感じ家臣某等に

も白銀・羽織・帷子等を下し給ふ、

一、寛文年中御改有之、左之通被仰出候也、

伊賀国拾万五百四十石、伊勢国安濃・一志・菴芸・

鈴鹿・河曲・三重・飯野・多氣八郡之内拾七万四百

拾石余、山城国相楽郡の内九千九百拾三石、大

和国添上郡・山辺・十市・城上四郡之内四万八

拾七石、下総国香取郡之内三千九百五十石余

<sup>目錄別紙、</sup>事如前々宛行之訖、全可領地之状

如件、

<sup>(六六四)</sup>  
寛文四年四月五日 御印

伊賀侍従とのへ

### 目錄

伊賀国一円

阿拝郡

六十九ヶ村

高三万九千四百拾三石八斗九升

山田郡 式十五ヶ村

高老万六千四百九十九石貳升

伊賀郡 五十ヶ村

高貳万七千九百五拾三石一斗八升

名張郡 三十八ヶ村

高老万六千六百七十三石九斗一升

### 伊勢国

安濃郡 八十五ヶ村

高五万八千拾貳石四斗五升

一志郡之内 八十五ヶ村

高四万八千五百四十六石三斗一升

菴芸郡ノ内 三十一ヶ村

高一万七千二百三十六石六斗六升七合

鈴鹿郡之内 拾ヶ村

高六千四百五十三石三斗五升三合

河曲郡之内 十ヶ村

高一万四石五斗四合

三重郡之内 二十ヶ村

高一万百三十三石三斗二升六合

飯野郡之内 二十九ヶ村

高一万四千四百三十三石七斗八升

多氣郡之内 二十ヶ村

高五千六百十九石六斗七合

### 山城国

相楽郡之内 十六ヶ村

高九千九百貳十三石四斗八升五合

小物成高入

### 大和国

添上郡之内 廿九ヶ村

高九千九百五十貳石五升貳合

山辺郡之内 四十四ヶ村

高一万七千貳百廿六石四斗七升五合

十市郡之内 廿六ヶ村

高一万七百十七石九斗

城上郡之内 十ヶ村

高三千四百九十貳石七斗八合

### 下総国

香取郡之内 十四ヶ村

高三千八十九石貳斗貳升八合

山城国大和国四郡之内

延高貳千五百六十七石四斗三升二合

下総国香取郡之内

為御用地被召上、替地功成

を以積として被下本高二  
不載候、

都合三十式万三千九百五十石余

右此度被指上候、郡村之帳面相改及上聞候処

被成下 御判也、此儀両人之成行依被仰付候、執達如例、

寛文四年四月五日

永井伊賀守判

小笠原山城守印

藤堂大学頭殿

### 雜記

一、伊賀上野上行寺に忠高之画像あり、則藤堂高睦公御自画也、其像に松山之近辺景德寺住侶廓山道昭、贊を加其詞に云、

藤堂越後守忠高公系出於鎌足藤公、

永禄年中武功鳴于世、有一女子名曰虎

姫(采織力)養入三井出羽守乗綱之男源助高虎

而娶之矣、故和泉守高虎公乃其嫡孫

也云々、

一、藤堂家之紋劍菱、多賀家之紋カタハミト云々、

一、高虎公御室ハ忠高の養女也、実多賀豊後守

忠高の弟といへり、多賀新助良成女也、母ハ菊池氏

肥後守親政女高虎公御室良新、助義政ヲ産生、良氏松尾山ニ而戦死、後池田伊予守秀雄之家

臣再嫁す、梅原将監武藤の息梅原勝右衛門武政を生産す、慶長十五

年十一月十四日伊州名張にて卒す、号鶴法妙林大禪定尼、二代めの

池田予州亡後勝右衛門武政高虎に仕、伊州名張住候、仍而高虎御母

公と勝右衛門ハ異父兄弟と云々、又云勝右衛門武政ハ郷州住人池田

秀雄初智秀吉公秀之字を賜ふ、改秀雄、慶長二年朝鮮於て死去、故引

率其人数而武政帰朝也、秀雄嫡子伊予守秀武、関ヶ原御陣に三成に

組して漸高虎公取持を以助命、高野山に入後に乱心して高虎公御領

に居住す、伊州城内に居住、此廊を今以伊豫丸と云々、梅原勝右衛

門従出則同城東の丸を預け置給也、子孫尚存す、

一、藤堂長兵衛守ハ渡辺勘兵衛札か嫡男部屋住の時、新知千五百石を

賜ふ、勘兵衛退去の節御縁を以とめ置れ、高虎公に仕、

一、東武上野東照宮ハ古来此方の御普請といへり、(武蔵国江戸)

一、久芳院殿御墓勢陽四天王禪寺に有之、御墓料百石御寄附也、但し

予州より引移し給ふ也、御父ハ一色氏、御母ハ仙石越前守御女也、

一、一色京大夫義有 同修理大夫義直 同左京大夫義秀

右一色家于今但馬国美含郡中野村に一色治部と云う者有之也、

一、松寿院殿御父ハ長越前守連久也、母ハ但馬国水尾城主垣屋駿河守

平宗時か妹也、御兄を長織部と号、高虎公に仕て七千石を領す、藤

堂監物元祖也、

堂監物元祖也、

一、松寿院殿御姉君南部二安法印室榮雲院と号、娘あり、半井右衛門佐從五位下利親の室と成、息半井驢庵瑞寿の母也、

一、松寿院殿御妹、熊野新宮堀内右衛門室、同左近・藤大夫・助之進三人之母也、

一、松寿院殿御弟、宮部左高虎公に仕て千石を領す、善祥坊名跡也、但し松寿院殿御願、宮部之為奉祀と云、

一、松寿院殿御入興之節、長家之一家を長次郎右衛門付添可參管之處、次郎右衛門申し候ハ、嫡子統二へ随侍可仕身として、今宜しき事有之候共、息女御供仕、他家へ不可参として不行、二家老橋本弥助付来る、是故藤堂造酒丞・同兵左衛門祖也、次郎右衛門か子孫今に藤堂監物家に有也、

一、高次公御代、辰ノ口御館上り代地本郷を賜ふ、後又染井を賜ふ、

一、御同人様御石塔甲山にあり、身延山にも有と云り、御法名三智院殿圓明日融大居士、

親正  
生駒勘助從五位下推示頭  
初勢州田丸三万石後讓州高松六万石

一正  
生駒讓岐守青野ヶ原ノ職忠二  
依テ讓州一四十七万石余

正俊  
同讓岐守從四位下侍初左近  
將監室ハ高虎御公女

高俊  
同左近守從四位下有・讓州十七  
万石余失放万治二年於羽州矢嶋  
卒葬龍源寺同室土井大炊頭利勝女

女  
藤堂内匠高吉室  
女  
松平石見守輝澄室

生駒左近  
賜八千石  
生駒權之助  
賜二千石  
女  
原目順阿称室  
生駒主殿室ハ大村四郎守總長女

生駒隼人佐  
女  
藤堂宮内長正室

一、高田専修寺代々記

堯秀  
前大僧正 親鸞上人十四世

堯朝  
堯良母美濃國大山城主遠江守信清女  
近衛關白信基養子トナル

堯朝  
權僧正堯秀弟母勢州松坂  
城主古田兵部少補女  
近衛關白信基養子ト成

堯圓  
權僧正 花山院左府定好男母  
慶司關白信尚女堯朝遷化  
以後近衛關白尚關白子嗣法堯秀

圓融

一、草野權右衛門

同喜藏重元

同權右衛門重永藤堂家立遣

一、鈴木弥右衛門

藤堂仁右衛門高刑 藤堂仁右衛門高經  
慶長廿年大坂ニテ戰死内室ハ  
松永伊勢守女信長公姪  
秀吉公ヨリ高虎ニ被下高刑ニ被下ル、  
内室高虎公妹君

同仁右衛門高広

養休軒  
内室専修寺同駱女

同仁右衛門高光

刑部 又後二可靜軒  
内室藤堂采女女

同惣左衛門外記高一

女  
藤堂出雲室

女  
藤堂主膳室

同儀左衛門

同仁右衛門高房

初武右衛門ト云代々名  
内室藤堂新七郎良長女

同兵藏良充

同外記良弼

実藤堂金七男

同仁右衛門高美

久米之助 武右衛門 初高富  
藤堂八之助縁組  
後内海平右衛門重旧室

女  
藤堂仁右衛門高美室

同求馬良將

女  
藤堂敦馬光信室

女

女藤堂出雲妻

女中川藏人政清室

多門高維  
初男五郎 仁助  
別知ヲ賜フ

女若原藤五郎良興室

女藤堂左膳室

同仁右衛門

女

女

女

一、足田勘左衛門

高麗御陣有功  
多病後任  
号修理

同勘左衛門

大坂冬打死

同勘左衛門

美方名跡  
四百石夏の陣

同勘左衛門氏方

久居村  
百五十石

同勘左衛門実氏

同勘左衛門氏円

美進七郎衛門  
次男故有之  
浪人越山五郎  
左衛門

同源大夫

同源大夫

同只之進 住中村

一、藤堂采女元則

有故而  
絶家

同采女元住

号可休

同長門元光

内室□□□□姫君  
於梅君元□ヲ卒ス故二不  
家督

同伊織

佐伯権之助

女藤堂四郎衛門妻

女藤堂新七郎妻

同采女高綱

初ハ元綱、高ノ字拝領

女藤堂新七郎妻

女佐伯権之助妻

女美浦藤兵衛妻

同磯之進

初藤助磯之進、後伯父伊織為  
為養子

同伊織元甫

初藤助磯之進、後伯父伊織為  
為養子  
妻後  
本家ヲ  
看抱

同磯之進

美長門男  
早世

同伊織元甫

美長門男  
後守女

同伊織元亮

美藤堂勘ケ由男

同才記元亮

美弟

女早世

同民武元武

女藤堂新七郎妻

藤堂弥五左衛門

同采女女 元杜

同采女元甫

後長門  
彈正幼少二付為看抱

同采女元福 樂正

總次郎

女水上權大夫妻

実高橋權室之妹也

女藤堂長兵衛妻

一、箕浦作兵衛

本國江州箕浦住人

岐阜殿に仕福嶋を預ル  
内室藤堂高虎公御妹

藤堂作兵衛忠光

紀州粉河より高虎公に仕、  
度々戦功にて御同姓に被仰  
付、知行二千石にて一万石の  
軍役也内室村井左馬之丞  
如縁女

同与一郎忠久

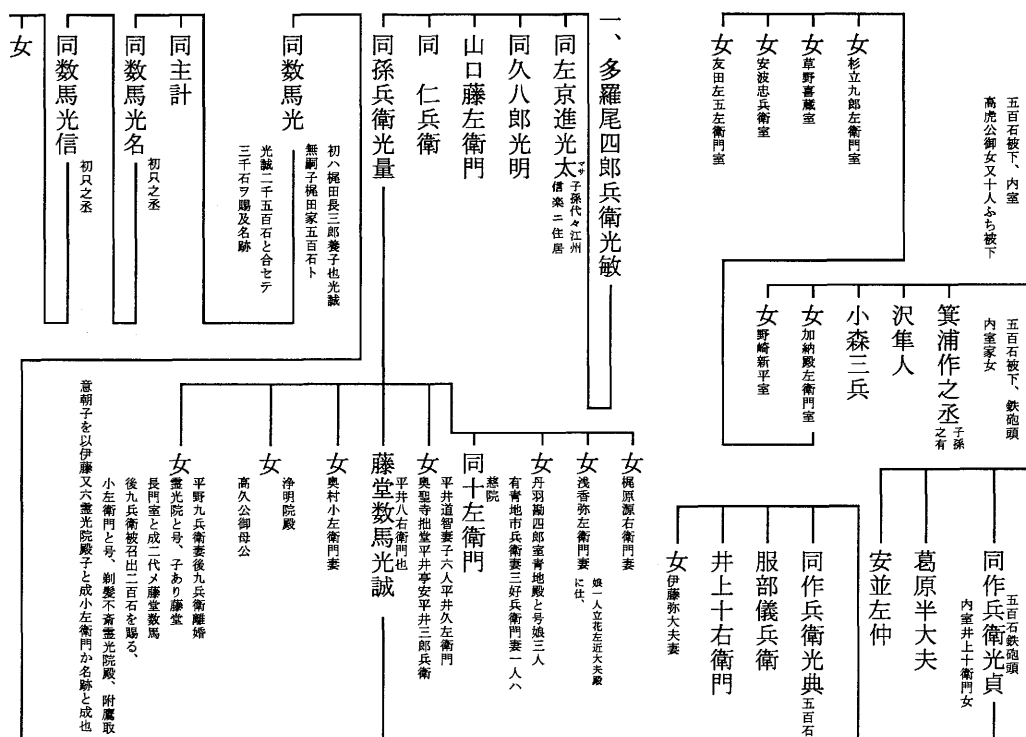
部や住にて千石被下親家督  
一所に被下合三千石預  
の者も被仰付候へとも、病身  
之役義知行とも指上候處  
無役にて千石被下、内室  
佐伯権之介女

女藤堂孫八郎忠重室

同作兵衛忠孝

同作兵衛





同只之丞 実藤堂出雲元武末男也

一、多賀豊後 — 同左近 — 同吉左衛門 — 同又四郎

同新兵衛玄蕃組

同新助 新七郎組  
是ハ一説也可考

一、久居付藤堂左平太先祖左之通  
藤堂駿河守 — 同平助 — 同大藏後各西源左衛門と名乗

右の後高陸公御代先祖の名被仰付、藤堂大藏に御改め被成候、紋酸漿也、それより代々藤堂を名乗

一、高久公寛永十五年三月二日武府神田明神へ御参宮被遊、夫より藤堂兵左衛門玄総宅へ被爲入、玄総方ニ御居住、正保元年三月三日將軍家光公へ御目見被遊る、時に七藏、同四年玄総宅より御本殿へ御移被遊候、時に十五歳、此時玄総へ中島来御脇物被下候、

一、高久公御表徳水知斎と奉申也、

一、高陸公御表徳桂友軒と奉申也、

一、同御母ハ平井徳右衛門娘、母杉本氏奉祀平井奎右衛門

一、高通公御三男、橋本弥十郎様貞享三年六月廿八日初而 高久公へ御対顔之節学助と御改名、長谷部国重の御腰物被進候、代百貫目

一、大輪院様御假御法号天台比丘玄門奉付也、

大雲院殿性谿高雄大居士

右之通日光御門主様より御法号参候而、大輪院殿と申奉る也、  
(みえだいがくれきしけんきゅかいれいかいこもんじよのかい)